



高橋教授の

この人に 会いたい

Vol.69

ゲスト

国光あやの

氏

衆議院議員、総務大臣政務官、医師

自由民主党の国光あやの衆議院議員は、かつて厚生労働省の医系技官として診療・介護報酬の改定や新型インフルエンザ対策、専門医の立ち上げに向けた実務を担当した。2期目の現在は総務大臣政務官として情報通信、地方自治関連の法案審議などに参画し精力的に活動している。政策決定の裏方から政界に転じて見えたものとは……。医療界のタイムリーな論点について、高橋泰教授と熱く語り合った。

持続可能な公的皆保険制度の実現へ ヘルスケア産業の成長促進は急務

学生時代に50カ国を訪問 社会問題に関心抱く契機

高橋 今日、厚生労働省の医系技官から衆議院議員に転身した国光先生をお迎えしました。厚労省から見ていた国会議員の仕事と実際に議員になってからの違い、技官時代の仕事はどう活かされているかなどについてうかがいたいと思います。まず、国光先生が医師をめざしたきっかけを教えてください。
国光 私は山口県の小さな島(屋

代島・周防大島町)で生まれました。高校生のとき、野口英世が主人公の映画「遠き落日」を見て、黄熱病の研究の末、アフリカで命を落とした英世の生き方に感動しました……。「世界で一番困っている人たちのために尽くそう。アフリカだ」と思ったのです。そこで、熱帯医学研究所がある長崎大学に進学しました。
高橋 私は学生時代、バックパッカーとしてアメリカやインド、ネパール、タイを旅したのですが、

国光先生もずいぶん海外を訪れたそうですね。
国光 アフリカ、東南アジア、南米など50カ国ぐらいに行きました。発展途上国を訪れるうち、病気の背景にある貧困、気候変動の問題、政情不安などに関心を抱くようになりました。砂漠に井戸を掘るペシワール会の中村哲先生の活動にも影響を受けました。最初は熱帯医学研究所か、「国境なき医師団」に入ろうと考えていたのですが、政治や政策面から課題を解決した

と思うようになり、厚生労働省の門をたたきました。バックパッカー経験がなければ、今頃は勤務医をしていたと思います。
**世の中の課題と向き合う
政治の力で国を変える決断**
高橋 厚労省では新型インフルエンザをはじめとした感染症対策、診療報酬・介護報酬改定などさまざまな政策、制度づくりに携わりましたね。
国光 私は物事を仕組みで考える

撮影=関口宏紀

ことが好きで、病院の経営マナージメント関連の政策にかかわれたのはよかったです。ただ、役所にいると特定分野の情報量がかなり多く、1つのテーマについては政策通になるのですが、世の中全体の課題と比べると極めて局所的です。診療報酬にしても財源がなければ成立しません。そのような限

界を感じていたとき、偶然、衆院選のお話がありました。
高橋 2017年の総選挙に厚生大臣を3度務めた丹羽雄哉先生の後継者として出馬したときは驚きました。当時は保険局医療課課長補佐として超多忙で、「私がやります」と手を挙げるような雰囲気ではなかったのではないのでしょうか。

国光 人生、何かあるかわかりませんが、迷いに迷いましたが、反対すると思っていた夫が「こういうご縁はめつたにないからやってみたら」と勧めてくれました。病院経営はじめ医療には厳しい現実があるのに、役人としての限界にもどかしさを感じていたこともあり、政治の世界から変えていき

たいと決断しました。
高橋 女性国会議員の比率は極めて低いです。ダイバーシティの時代ということもあり、いいタイミングだったと思います。実際の国会議員の世界は考えていたものと比べ、どうでしたか。
国光 新人の頃は365日、休みなしに大晦日まで駆け回っていました。家族との時間もあまりなく、小学生だった子どもには寂しい思いをさせたと思います。将来の出馬を検討している方から相談を受けることがあります。よほどの覚悟が必要になるというところは伝えています。同時に、政治分野のダイバーシティは待ったなしで、もっと女性が手を上げやすい環境をつくっていききたいと、永田町自体の効率化や働き方改革などにも取り組んでいます。



高橋 やはり医師で衆議院議員の松本尚先生は立候補するとき、「人に頭を下げる覚悟があるか」と聞かれ、「まったく問題ありません」と答えたと話していました。
国光 それは、地域を代表する衆議院議員には特に大事なポイント



医療の見える化で 選択の幅が広がる

——国光

です。私も人に頭を下げることは苦になりません。むしろ、自分自身が知らないことを知っていらっしやる方、たとえば農家、企業研究者の方などのお話を聞くのが好きです。学生時代、バックパッカーとしてフィールドワークをしていたことも関係していると思います。

現場の声を政策に活かす 出産一時金の増額に尽力

高橋 限られた部分ではなく広く

政策を実現するという点で、医系技官と国会議員ではかなり違うでしょう。

国光 見える景色はかなり違いますね。世界が広がり、エキサイティングでやりがいがあります。たとえば、今課題の子ども政策と医療との関連では、お母さんたちから切実に言われたのが出産費用の高騰です。現行の出産育児一時金は42万円ですが、実際には70〜80万円かかるケースもあります。医療

国光あやの

Ayano Kunimitsu
衆議院議員、総務大臣政務官

くにみつ・あやの●2003年、長崎大学医学部卒業。国立病院機構災害医療センターなどを経て05年、厚生労働省入省。この間、米カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)修士課程修了、東京医科歯科大学大学院博士課程修了。保険局医療課課長補佐を務めていた17年に厚生省を退職し、同年の衆議院総選挙(茨城6区)に立候補し初当選し、21年に再選。自民党女性局、青年局次長、党ネットメディア局次長、党文部科学部会副会長などを歴任し、22年から現職。日本医療法人協会特別顧問、全日本病院協会顧問

現場の実情もわかる一方、国民の切実なお声に寄り添う必要があります。岸田文雄総理に要望し、今年4月から50万円に引き上げることにになりました。さらに、患者にとってわかりにくい出産費用の見える化も進めます。

高橋 厚生労働政務官ではなく総務政務官を務めています。新しい分野ですが、いかがですか。

国光 専門の厚労分野はもちろん、衆議院議員として幅を広げたいので、地域を通して政策を広くみることができると総務省での仕事は新しい醍醐味があります。総務省には地方交付税交付金、マイナンバーカードなどの地方自治、5G、6Gなどの情報通信など厚労省と

は異なる仕事もありますが、たとえば5Gを用いて遠隔医療の実証事業を行うなど、医療とのかかわりもさまざまあり、DX、先端技術など他分野との融合で、医療の新しい発展を成し遂げたいです。

ロボット手術を選定療養に 保険外併用拡大で負担軽減

高橋 情報通信、デジタル分野の話が出ましたが、医療DXなどはもともと得意だったと思います。国光先生が今、特に力を入れて取り組んでいることは何ですか。

国光 ももとの志は「持続可能な公的皆保険制度をつくること」です。ただ、現実には成し遂げるためには「原資となる日本の成長、財政」もwin-winになるよう政治として責任をもつべきだと考えています。医療を社会保障としてだけでなく、経済をけん引する医療・ヘルスケア産業として、健康と成長を加速するエンジンとしたいです。そのために、積年の課題ではありますが、保険外併用の柔軟化が1つのキーと考えています。たとえば、医療機器の議員連盟の事

務局長としても取り組んでいます。が、手術支援ロボットは導入費用が高額なのにエビデンスが内視鏡手術とあまり変わらず、保険点数が同等に抑えられ、経営を圧迫しています。これを、たとえば選定療養にして、ロボット手術を選ぶ場合は一定の自己負担をプラスできないかという声の中核医療機関などからあります。

負担ですが、選定療養によって一定の自己負担額を出せばロボット手術を受けることができ、その負担を避けたい患者さんは同等のアウトカムである既存の内視鏡手術なども選択できるようにすれば、国民にとって「医療の選択の幅」が広がるというメリットがあります。

に、公社が運営する保険で自己負担分をカバーするフランスの「2階建て制度」については、財務省が内に勉強会を開いているという話を聞いています。そうした議論とセットにすれば、先生の提言も比較的スムーズに進む気がします。

の発想ですね。グリーン車はアメニティの部分ですが、そこにロボット手術や重粒子線などの技術の追加料金があってもいいということです。あらかじめ積み立てておいて、必要になったときにカバーする民間保険があるのは一番きれいです。それは推進すべきですが、そういう政策を推進することが大切であるという潮流をつくること

2階建て保険制度の議論を 始めるべき

——高橋

高橋 たとえて言えばグリーン車になればいいと考えています。

から活路を見出せないかと思っています。

高橋 泰

Tai Takahashi
国際医療福祉大学教授

たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了(医学博士)後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長を務めた

高橋 ロボット手術はかなり普及が進みましたし、国民から見ても非常にわかりやすい話です。私もそのあたりから議論を起さすべきと見ていたところです。今後の取り組みの行方に注目しています。本日はどうもありがとうございます。